

大阪大学医学部附属病院で入院している子どもたちへの教育支援

大阪大学医学部附属病院分教室

1 はじめに

大阪大学医学部附属病院分教室は病棟6階の小児医療センター（こどもの森）内に教室があり、医師からの許可を得た子どもたちが教室に登校して学習している。治療や体調の都合で教室に登校するのが難しい場合にはベッドサイドでの授業も行っている。子どもたちが入院に至った病気の種類は、悪性腫瘍（白血病、骨肉腫、神経芽腫、脳腫瘍などの小児がん）、心臓疾患（拡張型心筋症や拘束型心筋症、先天性心不全などによる心臓移植待機）、消化器系（クローン病や潰瘍性大腸炎）等、子どもによって様々である。

阪大病院分教室の特徴としては、特に悪性腫瘍と心臓移植待機といった長期の入院が多いことである。半年以上の入院をした子どもたちはこの5年間で全体の約40%と他の分教室に比べて多くなっている。悪性腫瘍について個人差はあるが半年から1年の入院、心臓移植待機に至ってはドナーが現れるまでの治療になるのでいつ退院するかわからない中で入院をしており、入院期間は1年を超えることも多々ある。多くの場合は2～3年、もっと長期間に及ぶこともある。これら長期入院の子どもたちが退院して地域校へ戻るとき、入院前と様子が大きく違っていたり、地域校への配慮事項が多岐にわたっていたりすることが多くある。

このような長期入院を経て地域校へ復学する時には、多くの場合医師などの医療関係者からもしくは保護者から退院時カンファレンスを行ってほしいという要望があることが多い。双方が開催について同意すれば退院時カンファレンスを行うようにしている。半年に満たない比較的短期間の入院については、復学時に医師などから注意点や配慮事項を伝えてもらうことが多いが、保護者からの要請があり医師が参加できる場合は開催することもある。

今回の研修会では特に長期入院の子どもたちが退院して復学する場合を想定し、小児がんと心臓移植の2つのケースに絞って我々が気を付けていることや医師からの配慮事項で多いことを取り上げた。

2 発表の概要について

発表は①退院時カンファレンスとは、②退院時連絡ノートについて、③退院時カンファレンスの進め方、④地域校の先生方をお願いしたいこと、という順番で話した。

3 退院時カンファレンスとは

このカンファレンスには病棟からは主治医をはじめ看護師や臨床心理士、CLS、ソーシャルワーカーといった職種の方々、地域校には、関わる機会の多い担任の先生と体調が悪くなった時に対応することが多い養護教諭の少なくとも2名には出席してほしいとお願いしている。都合が合えば地域校の管理職の先生に出席して頂ける場合も多い。

コロナ禍以前は分教室の教室や病院の一室を借りて対面式で行うことが多かったが、令和2年度以降はこのカンファレンスも多くの場合がZOOMなどを使ったオンライン形式で行われることが多くなり、制限が緩くなった今でも大半はオンライン形式で行っている。

オンライン形式で行うようになって地域校の先生も阪大病院までくる時間を取られなくなり、医療関係者が出張されている場合でも出張先からカンファレンスに入っていただくこともできるのでずいぶんと日程や時程の調整がスムーズになった。

I 実践報告

4 退院時連絡ノートについて

退院時連絡ノートをあらかじめ保護者や地域校の先生にお渡ししたりFAXで送ったりしている。また、学校ホームページからもダウンロード可能である。このノートはカンファレンス当日に話し合うことを項目化し、参加者が確認事項を効率よく把握できるように活用している。このノートで項目化された内容を主に医師からアドバイスをいただくことで子どもや保護者、地域校の先生方の不安を少なくできるようにしている。

5 退院時カンファレンスの進め方

多くの場合は①医師からの病気の説明、②生活面における注意事項、③学習面からの注意事項、④医療面での注意事項という順に進めていき、地域校の先生が医療関係者に聞きたいことが終われば医療関係者の皆様には退席いただき、分教室での学習の様子をお話ししたり、学校間同士で決めておくべきことをお話ししたりしている。

医師からの病気の説明については、地域校には病気のことを詳しく知ってもらって理解してほしいと望む保護者も多いが、あまり詳しく話してほしくない并希望される保護者もあり、事前にどこまで話していいのかを聞いて保護者が望む範囲でお話をしてもらっている。

生活面では登下校、校内の移動、給食、服薬などについて話をする。長期入院で体力が落ちているので無理をせずに短時間から登校を始めること、車いすや松葉づえなどを使用している場合にはエレベーターがあるのか、使用できるか、ない場合にはどうするのかなどを話している。給食については、薬の飲み合わせ以外にはしっかりと火が通っているのであまり給食において禁止される食べものはない。服薬については、昼に服薬があることはまれであるが、ある場合には子どもが管理するのか学校が管理するのかを決めている。

学習面については、特に体育でどれくらいのことのできるのかが話題に上がる。また、退院後1か月程度以内に行われる予定の校外学習や宿泊行事などがあれば参加が可能なのかも合わせて話すこともあるが、行事直前の外来診察で決めることが多い。

医療面では、小児がん、心臓移植後の子どもどもの免疫力がかなり低いので、感染症流行時の対応については医師が一番心配されるところである。ある程度の流行期に入ったと思われると欠席を検討したほうがいいという話になることが多い。

6 地域校の先生にお願いしたいこと

入院している子どもたちが分教室に通うようになって学籍が変わったとしても、子どもたちの心は自分の学校は地域校だと思っている。しかし、退院した時にみんなは迎え入れてくれるのだろうかと不安に思っているところもある。地域校の先生にはお忙しいことは重々承知ではあるが、HRや行事の時などにオンラインで子どもたちとつなぐなどどんな形でもよいから地域校と入院中の子どもたちとのつながりを大切にして欲しいと考えている。

7 おわりに

長期入院の子どもたちが無事に退院して復学する時、子どもたちは退院して今までの生活に戻ることができる喜びとこれからの生活の不安も多々あるのが実際のところである。退院時のカンファレンスを行うことによって本人や保護者の医療面や生活面での不安を少しでも取り除くことができたらと思っている。